

開いた質問・閉じた質問 再考

遠山宜哉

Rethinking Open-ended and Closed Questions in Helping Interviews

TOHYAMA Nobuya

開いた質問と閉じた質問の区別は一見分かりやすいため、援助的面接を学ぶ者の理解を得やすいが、両者を区別するのは形式的にも機能的にも難しい。また、一般的には開いた質問が推奨されるが、使い方によっては閉じた質問も有益でありえるし、開いた質問も話者を困らせることがあるので一般化は避けるべきであり、この質問分類に基づいて質問の適否を論じるのも適切ではない。必要なのは話者にとって自由度の高い質問になるよう聞き手が考えることであり、援助的面接ではそれに加えて話者を不適切に扱っていないかつねに確認して柔軟に修正しつつ対応することであると述べた。

キーワード：開いた質問 閉じた質問 援助的面接 応答の自由度

The distinction between open-ended and closed questions in the context of helping interviews is easy to understand for beginners. However, it is very difficult to distinguish between these types of questions in terms of style or function. Open-ended questions are recommended in general, but closed questions may often function usefully and open-ended questions sometimes prove troubling for clients. Generalization should thus be avoided, and judgment about the adequacy of questions based on this distinction is not desirable. In conclusion, it is argued that it is necessary to simply provide advices regarding ways to improve questions to allow the clients to respond more freely, and moreover, in the case of helping interviews, it is important to adapt the questions via a process of continuously monitoring whether the clients are coped adequately or not.

Key words: open-ended question, closed question, helping interview, degree of freedom of response

I. はじめに

対人援助場面で行われる援助的面接の文脈では、どのような質問をするのが援助的か、という観点から質問について多くのことが議論されてきた。その中にはそもそも質問をすることについての否定的な見解、ないしは慎重な意見も少なくないが(遠山, 印刷中)、質問を面接の重要な構成要素とみる立場においては、それぞれの援助哲学や方法論に基づいて多くの質問が工夫され、質問に名前をつけてその有効性について検討

がなされたりしている。

ただ、援助的面接の文脈における質問全体を広く見渡した場合に、どのような援助方法にも共通して論じることができる質問区分はあまり提案されていない。Benjamin (1987 林・上杉訳 1990) は援助面接に関する入門書において質問について大きく扱っているが、質問の2分法としては「開いた質問、閉じた質問」と「直接的質問、間接的質問」の二つを紹介しているだけである。玉瀬・井上(1994) はこれに加えて、「想起質

問recall question」と「処理質問 process question」の区別についても言及しているが、あまり一般的とは言えない。広く知られ言及されることも多いのは何といても「開いた質問（開かれた質問）」と「閉じた質問（閉じられた質問）」の区別であろう。これはカウンセリングや心理療法の領域に限らず、看護や福祉の領域でも、あるいは社会調査の文脈などでも使われており、その理解や使い方について看護師の国家試験にさえ出題されるほど重視もされている。

この分類方法について説明や議論がなされているのは、主として援助的面接の初心者を対象とする文献である。つまり、初心者はそれと自覚せずに面接を進めると、閉じた質問を繰り返してしまい、話者（クライアント／患者）との関係を歪めてしまうことに対して警鐘を鳴らすという体のものである（Egan,1986 鳴澤・飯田監訳 1998；Hill, 2009）。マイクロカウンセリングを提唱しているIveyも大きな技法の体系の基礎中の基礎としてこの二つの質問の使い分けについて論じている（福原・アイビー・アイビー, 2004）。基礎であるから、上達すれば質問の二分法にこだわることなく面接を適切に進めることができるようになる、という含意があるものと考えられるが、かといって人口に膾炙しているこの分類が厳密さを欠くものであり、誤解を生みかねないものであって構わないということにはならないだろう。

本論では、閉じた質問ではなく開いた質問が望ましい、といった一般的な理解が適切か否かを再考し、そこにどのような問題が含まれているのか、質問の仕方に関するより有益な示唆としてどんなものがあれば良いのか、という点を論じる。

II. 定義上の混乱と不可能性

1. おおよその定義

閉じた質問と開いた質問との違いは、「はい」か「いいえ」で答えられるか否かである、というのがもっとも素朴な規定であり、これだけでだいたいの趣旨は理解できる。さらにさまざまな文脈で定義されているところを整理すると、「閉じた質問」は、「はい・いいえ」や特定の事実や数、多肢選択への応答など、短い答えをとまなうものであるのに対して、「開いた質問」は話者の考えや意見などについて比較的長い答えを伴うものであるということになる。後者については「もう少し話して下さい」といった疑問文を使わないものも含

めるというのが一般的理解であり、「カウンセラーも驚くような答えが出てくることもある」とわざわざ断っている定義もある（Miller, Moyers, Ernst, & Amrhein, 2008 pp.17-18）。Benjaminは以下のように包括的に説明している。

「開いた質問は広く、閉じた質問は狭い。開いた質問はクライアントの可能性を広げ、閉じた質問はある特定の答えにクライアントを限定させてしまう。開いた質問はクライアントの知覚領域を広げるように働き、閉じた質問はそれを縮小してしまう。開いた質問はクライアントの見方、意見、考え、感情等を導き出すが、閉じた質問は厳正な事実のみを要求する。開いた質問は関係を広くし深くするが、閉じた質問はそれを制限する。要するに、開いた質問はカウンセラーとクライアントとの間に信頼感を育てるのに大きく働き、閉じた質問は常にそれを枯れさせてしまう。」（Benjamin, 1987 林・上杉訳1990 pp.226-227）

2. 回答によって質問を分けることの問題

質問を論じるのが難しいのは、聞き手（発問者）の質問意図のままに話者が回答してくれるわけではないからである。ある答えを得たくて投げかけた質問が、はぐらかされたり、逆に質問によって返答されたり焦点のずれた回答が出てきたりするのには、援助的面接に限らず常にみられることである。したがって、開いた質問に対してあまり豊かな応答が得られないこともあるし、閉じた質問をしたつもりなのに、話者が滔々と話し始めるということも往々にしてみられる。これは、二つの質問をそれに対する回答の長さによって規定するという逆立ちした発想に拠っているために生じることではないだろうか。

実際には、質問紙調査を行ってみると、開いた質問の方が閉じた質問より答えにくいと感じられるのだが、返答はたしかに有意に長くなるという（玉瀬・田中, 1988）。ところが、玉瀬・鳥巢・井川(1991)の実験的研究によると、閉じた質問であっても開いた質問が続いた後に発せられた場合には、閉じた質問が連続する場合よりも明らかに豊かな応答が得られ、逆に閉じた質問が続いた後で発せられた開いた質問への回答は、開いた質問の後よりも減少するという。また、連続する質問が互いに関連性をもつ質問であれば、そうでない場合よりも長い応答が得られるということも明らかにしている。つまり、二つの質問の形式だけで応答が決まるの

ではなく、質問の「流れ」ないし文脈が重要であり、ひいては聞き手が話者の話をどの程度、長く聴こうとするのが重要であることを指摘している。

3. 文の形では区別できない

開いた質問と閉じた質問は文の形によって分けることができるだろうか。

「それについてもっと教えてください」といった依頼文も開いた質問であるとする、疑問文でなくてはならないという制約はすでにない。そして、先の玉瀬・田中(1988)によれば、このような形式が他の疑問文による質問より長い応答が得られたくらいである。他方、「なに・だれ・いつ・どこ・どのように・なぜ」といった疑問詞の付いたいわゆるWH疑問文ならば開いた質問かと言えば、「どちらにお住まいですか?」「ご兄弟は何人ですか?」などは閉じた質問に分類せざるを得ない。

明らかな「はい・いいえ質問 yes-no question」でさえ、開いた質問のように機能させることは可能である。

- a. 「そんなに辛い日々の中でもいくらかマシだったのは、どんなときでしょうか?」
- b. 「そんなに辛い日々の中でもいくらかマシだったときはありましたか?」

援助的面接の実際場面では、「いくらかマシだったことがある」という前提を含んでa.のようにWH質問をすることが推奨されるかも知れない。「そんなことはありませんでした」と簡単に片付けることが難しくなり、何とかそれについて考えようとする構えを作ってもらえるだろうという考えからである。つまり、後述する限定的な開いた質問をするということである。しかし、実際にはb.のように訊ねても同じような回答が得られることがある。聞き手としては「マシだったときについて、いろいろに語って欲しい」という願いがあがあるが、それを押しつけがましく訊ねることを憚っていると考えることができよう。つまり、ポライトネス理論というネガティブ・ポライトネスと呼ばれる配慮がなされているとみることができる(滝浦, 2008)。

また、実際の援助的面接場面では、主述を備えた文ばかりが質問(問いかけ)ではない。「たとえば?」「他には?」といった、誘いかけるような問いかけの文も、

話者の自由な応答を導くのに有益であるし、さらには、さらに話者の話を聴こうとする非言語的な姿勢や表情で「?」と伝えることも、同じような機能を果たすだろう。

4. 二つの質問を分ける発想の有用性と問題点

以上に述べたように、開いた質問と閉じた質問を区別するもとなった発想には、有益なものがあることは確かである。すなわち、話者にとって答えるのは少し難しいが、自由に思うさまのことを豊かに述べられるような問いかけと、何を答えるのかが限定されている的確で明確な応答をしやすいが、回答の自由度は制限されている問いかけとがあり、それを聞き手は状況や話者の状態によって使い分けられることが求められる、ということである。しかし、質問が開かれているか閉じられているかは截然と区別できるものではなく、前後の文脈や話者・聞き手の関係性などによっても左右されるものである。

援助面接に限らず質問全般について広く論じたDillon (1990) は、この二つの質問の区別について、考え方は重要であるが、さまざまな領域で展開する多様な質問に応用されているので、実際にはあまり役立たないと述べている。援助的面接にとって重要なことは、話者の様子や全体の文脈を常に考慮し、みずからの質問について常に自覚的であることが必要であるという教訓であろう。

ただし、そこには相手からの反応が多く得られるほど良い質問、という発想がうかがわれる。援助的面接においては、質問が話者に対してどの程度の侵襲性をもつのか、という視点を外してはならない。この質問分類にはその点への配慮が薄い点は注意しなければならない。

Ⅲ. 「閉じた質問」再考

開いた質問と閉じた質問があるとすれば、それを適切に使い分けるのが良い面接であると言われる(玉瀬, 2010)。すでに述べたように、二つの質問を区別して論じる動機の一つとして、初心者に対して閉じた質問の繰り返しを戒めることがあった。しかし、閉じた質問は使う意味がないとは言えない。以下では、閉じた質問を使う意義について整理しておきたい。

閉じた質問は簡潔に答えられるものであるとされた。そのことが直ちに話者にとって答えやすい質問になる

とは限らないが、少なくともどのように答えれば良いのかが話者にとって理解しやすい、ということが重要な点である。したがって、みずからの思いや考えをうまく表現できない話者、独力でさまざまな判断をすることが困難な話者にとっては、この形の質問は救いであろう。また、そうでない話者にとっても、求められていることに対して適切な応対になっているかどうか理解できるので、互いに意思疎通ができたという満足感が得やすいだろう。

このような質問の極端なものがエリクソンの使ったと言われるイエス・セットである(O'Hanlon, 1987 森・菊池訳 1995)。「はい」と答えられる自明な質問を重ねることで話者の肯定的な構えを作るという技法である。「今日は○曜日ですね」「はい」「前は○日にいらっしゃいましたから○日ぶりですね」「はい」……というやりとりになる。聞き手にとって新規な情報は得られないが、二者の関係を作るという意味をもつことができる。とされる。

他方、聞き手にとって閉じた質問は、欲しい情報が欲しい形で入手できるというメリットがある。つまり聞き手の枠組みにそって質問し回答を得ることができるということである。ここが逆に話者の枠組を蹂躪することに結びつきやすく配慮が必要な点でもある。

また、閉じた質問と短い回答の往復はすぐに終わってしまうために、さらに質問を重ねてしまいかねない。そこで一問一答式の関係性が二者の間に発生してしまい、質問する人と答える人という階層性が発生してしまるとされる。

しかし、これは閉じた質問それ自体に責があるのだろうか。閉じた質問に対して短い回答で終わってしまうのはなぜだろうか。それは、聞き手がその回答にまつわるさまざまな話者の語りに関心を向けていないからではなからうか。そのような関心があれば、開口一番の答えが、「はい・いいえ」の一言であったとしても、さらに続く発言を待とうとするだろう。型にはまった答えだけを得て先に進みたいという聞き手側の姿勢が一問一答の関係性を作るのであり、豊かな回答を待つ姿勢があればそれでは終わらないのではないか。待っていると、それだけの応答を期待しているわけではないことが話者にも伝わり、開いた質問と似た問いかけになる可能性がでてくる。

すでに述べたように、「何か工夫されていることがありますか？」といった形式上の「はい・いいえ」質問

であっても、実際には「どんな工夫をされていますか？」という質問を遠回しに訊ねるのと似た機能をもたせることはできるし、さらに「どんな工夫をされていますか、お聞きしてもよろしいでしょうか？」と訊ねることさえ可能である。

このように考えてくると、援助面接について初心者への助言を書いたHillが、閉じた質問は援助過程において限られた役目しかもたないとしたのは浅薄な理解と言わざるを得ない。ただし、それに続けて閉じた質問の使用上の注意を書いているのは参考になる。そこには、①たくさんをを一気に聞かない、②話者が自分自身について考えるのを妨害しない、③相手の様子をよくみる、④特定の反応の仕方を強制しない、とある(Hill, 2009)。これらを守れば閉じた質問の可能性はより豊かなものになるだろう。

IV. 開いた質問と閉じた質問の間

1. 限定質問

「はい・いいえ」質問が閉じた質問の典型だとすると、「もう少し話してください」は開いた質問の典型だろう。しかし、この二つの典型の間にはさまざまな亜型がある。開いた質問の側からみると、その質問に少しずつ限定を加えていくことにより、次第に話者の自由な応答可能性は制限されることになる。たとえば、

- a. 「もう少し話してください」
- b. 「どんな風に対処したのかについて、もう少し話してください」
- c. 「あなたのとった対処のうちもっともうまくいったのは何でしたか」
- d. 「工夫した対処のうちうまくいったのはどちらでしたか」
- e. 「あなたなりの対処はうまくいきましたか」

という5つの質問において、bは何について話すかに限定を加え、cは「うまくいった」ことに限定し、dでは二者からの強制選択となり、eでは「はい・いいえ」質問になっている。これまで論じてきたことからすると、dやeでも開いた質問のように機能することはあり得るが、bやcはもはや完全に開かれた質問ではないことは明らかであり、さりとて閉じた質問とも言えないであろう。ここでは、こうした形の質問を限定質問と呼ぶことにしよう。

原井 (2012) は、開かれた質問に限定を加えた形のもの「制限つき開かれた質問」と名付けていくつか例示している。そこには、解決志向ブリーフセラピーで言うミラクル・クエスチョンのような一定の場面を想定した上で行う質問が挙げられている。こうした質問は聞き手が提示する枠組みに話者を招き入れることで、回答の範囲を絞ることによって回答の予見性を高めながら、話者にはあくまで自由に回答できる感覚を残し、より望ましい生活について、会話への参加意識を高めることができると考えられる。

ミラクル・クエスチョンでは、奇跡のように良いことが就寝中に起こる、という設定をした上で、翌朝に目覚めたときにどんな違いに気づくかを尋ねている。話者は良い変化のことでないと語りにくい状態に置かれることになる。もちろん、良い変化など思いつかない、あるいは何も変わらないと応答することもできるが、「どんなことから変化に気づくでしょう」という質問によって、極小の変化を見出し創出するよう誘いかけられるのである。

2. ソクラテスの質問

聞き手が会話の進む方向性を誘導するだけでなく、その会話の到達点についてある程度の想定をもつ場合がある。認知行動療法でいうソクラテスの質問がそれである。

認知行動療法では、たとえば自動思考を修正するためにこの質問法を用いる。その利点としてあげられているのは、「治療関係の向上、探求しようという意識の刺激、重要な認知と行動の理解力が高まること、患者が治療に積極的に携わるようになることなど」(Wright, Basco, & Thase, 2006 大野訳 2007 p.115) である。患者が柔軟で創造的な思考力を高めるように質問することを求め、自力で考えることを重視するので、誘導質問は避けるよう推奨されている。しかし、聞き手は、この質問法でどのような方向に導くか、どのような成果の達成を目指すのかについてある想定をもって面接に臨んでいる。話の内容がずれたり焦点がぼけたりしてしまうことを避け、会話の進み方を誘導しているのは確かである。

ここでなされているのは、自動思考の修正といった聞き手側の枠組みの下で、聞き手と話者とが目標を共有し、聞き手が用意した質問群を手がかりに探求を進めていくという作業である。したがって、話者の応答

は予め制限されているが、その制限は話者によって予め織り込み済みということになる。聞き手は会話が一定の軌道を逸脱しないように質問で制御しつつ、想定された気づきに話者が自力で到達できるように誘いかけの働きをしている。聞き手にとって到達点はあらかじめ想定できており、話者の自己探求がどのようなことにどんな形で到達するかが予測できない面接とはかなり異なるものになっている。

3. 質問に含まれる前提

質問に限定が加われば、それだけ多くの前提が含まれることになる。「どうなっていたら良いとお考えですか?」といった全般的な質問でも、「あなたは良くなりたくて考えている」という前提に立って質問がなされている。「どのような職務が与えられれば意欲が出てくるでしょうか」という問いには、「職務によっては話者も意欲を出す」という前提があるだろう。さらに「話者にとっては職務を選んで意欲を出すことが望ましい」という聞き手の前提が含まれているかも知れない。この質問をされた話者は、「職務については、それによって意欲が出るとか出ないとかという観点から考えていない」とか「意欲がでるかどうかと職務内容は結びつけて考えていない」といったことは主張しにくくなってしまふ。つまり聞き手の質問に含まれる前提は、話者とその前提に立っていないこと、その前提を受け入れられないことを表出しにくくしてしまう。他方、聞き手が質問に含ませた前提に強い抵抗を感じない話者は、そのまま聞き手の前提によって誘導されていくことになるだろう。

聞き手にとって前提を完全に排除した質問をすることは困難である。したがって、少なくとも聞き手はどのような前提が質問に入り込んでしまうのか、それがどのように話者に伝わるのかについて自覚的であることが必要になる。この事情は閉じた質問においても同様であるが、含まれる前提が限定質問では見えにくくなっているだけに、質問をすること自体が与える影響に留意することが求められる。

V. 開いた質問の限界

1. 開いた質問のもたらす困難

開いた質問の利点については多く語られてきたが、Rollnick, Miller, & Butler (2008 後藤監訳 2010) がそれを整理して述べている。要約すると、開いた質問

は、① 話者に返答の余地を多く与えている点、② 聞き手でなく話者にとって重要な事柄について述べるように勧めている点、③ 話者がより能動的に関与して面接過程に影響を及ぼす機会を提供している点、④ 援助的な関係を促進する点、⑤ 聞き手が直接訊ねてはいなくても、潜在的に重要な事実について話者が語ることを可能にしている点、に利点があるという。

しかし、開いた質問は、それを投げかけられる話者にとっても、訊ねようとする聞き手にとっても難しい課題をもたらすことになる。

話者にとっては応答することに困難を感じる場合がある。杉原(2012)は次のように述べている。

「オープンな質問では反応の自由度が高すぎて、うまく答えられないクライアントもしばしばいます。自分を露わにすることを恐れているクライアントや、極度の不安に襲われているクライアントは、閉じられた質問の方が安心できるものです。クライアントの反応を注意深く観察して、反応を見ながら臨機応変に進めることが大切です。」(p.92)

自由に応答できるということが逆に負担になるということである。話者によっては、どんな意図で質問されているのか、どんな回答が求められているのかが把握できず、応答に困難を感じる。すでに触れたように、結果として回答できて、そのことで得るものも少なかつた場合でも、閉じた質問に比べると当初は答えにくさがある。それを敢えて答えようとするのは、話者の意欲や聞き手との良好な関係性があつてのことである。聞き手はその状態を査定しながら、臨機応変に質問の仕方を変えていくことができなければならない。

他方、開いた質問は得られる回答が多様性をもつだけに、聞き手にとっても柔軟な対応をする力が求められる。玉瀬・井上(1994)の実験的研究では、話者の応答の質を具体性・精緻性・的確性で評価したとき、開いた質問では応答の具体性と精緻性が高くなるが的確性は低くなることが示されている。質問によって訊ねていることに答えるというより、その質問によって連想する事柄について語る、というような答え方も許容されるので、会話は何かをめぐって一直線に進むというより、寄り道を重ねていくことになる。初心の聞き手はこれを不安に感じるために、閉じた質問を繰り返すことになる。会話の流れが脱線したり複線的になったりすることは、話者に回答の自由度を提供することに伴う副産物であるが、それによって聞き手自身が面

接の持ち方に不安になることなく、なおかつ一定の幅の中に会話の進行を統制する力が求められることになる。

2. 問い方の工夫

神田橋(1994)は精神科医として患者に来院理由を訊ねる最初の質問は疑問文を避けるよう推奨して以下のように述べている。

「通常、『きょうこちらに来られるようになったわけを、まず、きかせてください』というように持ちかけて、問診にはいってゆく。理想的にいうと、問診の第一声は疑問文でないことが望ましい。問う人、答える人の役割ができて、面接試験や口頭試問のような雰囲気が生じることを避けたいからである。最も悪い例は『きょうこちらに来られるようになったのは、なぜですか?』という導入文である。」(p.145)

同じように来院理由を訊ねる場合でも、疑問文では訊く人と答える人の階層性が生まれてしまうと警戒しているのである。すべてを依頼文で訊ねるのは無理としても、冒頭はそうした関係性への配慮が必要ということである。

さらに神田橋(1994)は「なぜ」という質問についても考察しており、援助的面接においては極力回避すべきとしている。Hill(2009)も同様の提言をしている。質問の形をとりながら叱責や強要(「なぜ、やらないの」)の意味が含まれやすいからである。また、神田橋は「なぜ」質問が意味や説明を求めるという意味でWH質問のうちもっとも応答に労力を必要とし、答える方は難儀するという。この質問が可能なのは、「なぜ、うまくいったのか」というように上首尾についてたずねるときと、話者・聞き手関係が良好で共に事情を探索しようという関係ができているときに限るとしている。

このように同じことを開いた質問で訊ねるにしても、その問い方にはさまざまな工夫の余地がある。

3. 形だけ開いた質問と最適な使い方

開いた質問の形はとっているが、その利点を生かすように使われていない状況は少なくない。

たとえば、「調子はいかがですか」といった問いかけも、単なる常套句として使われているなら、そこに聞き手の関心もなければ話者自身の探索もない。「もう少し詳しく話してくれませんか」という誘いかけにしても、文脈の中での必然性もなく投げかけられるのなら、

聞き手が単に次の展開を話者に委ねてしまっているだけの安直な対応、あるいは窮余の策に過ぎない。さらに極端には、Benjamin (1987 林・上杉訳 1990) が提示しているような、「そんな人たちからは離れていた方がいいと思いますよ。彼らが何をたくらんでいるか誰でも知っているんですから。はっきりしていると思いますが、どうですか？」(p.228) といった質問については、「閉じた質問よりなお閉じている」という表現が当てはまる。

フィンランドで発展したオープンダイアログという対話実践では、グループでの対話において開いた質問を使うことが推奨されている (Olson, Seikkula, & Ziedonis, 2014)。ここで行われる対話は、対話を続けること自体に意味を見出しており、対話が到達すべき地平を想定していないし、誰がどう答えるかについての規則もない。回答者が何らかの洞察を得ることを目指してもいない。質問文に前提を含んで何かを暗々裏に伝えることも求められない。こうした実践の中でこそ典型的な、開いた質問が実現できるだろう。

VI. 結論

開いた質問と閉じた質問の区別は素朴で一見分かりやすいために、援助的面接の初心者理解を得やすく、また伝えやすいものであった。しかし、実際に両者を形式的に区別することも、会話における機能から区別することも困難であり、移行形と言える質問法も多いのでとても截然と分けられるようなものではないことが分かる。

一般的には開いた質問を推奨し閉じた質問を控えるように勧められるが、典型的な閉じた質問でも使い方によって豊かな応答をもたらすことがあり、開いた質問として投げかけたものが話者を混乱させ苦しめてしまうこともある。

Dillonが述べたように両者の区別に実質的な意味を求めるのは不毛であるにしても、そこに反映されている考え方にみるべきものがあるとしたら何であろうか。それは、質問をする際には回答の自由度に常に気を配り工夫せよ、ということに尽きる。

開いた質問と閉じた質問の区別は、援助的面接場面に限って論じられているわけではない。話者や質問紙の回答者から豊かな情報を得ようとする場合にも自由な応答を許容する工夫が論じられている。しかし、たとえば同じように対面で行う調査面接と援助的面接を

比べても、前者がもっぱら聞き手のためにあるのに対して、後者では話者にとって望ましいことがすべてに優先する点が決定的に異なる。すべての質問が話者のためにある。そして、話者がみずから思い、考え、行動していくのを邪魔しないことを基本としている。

したがって、自由度を制限するにしても許容するにしても話者のためになるかどうかという視点が優先する。その意味では、自由度の高さがもたらす困難や不安・混乱についての配慮という視点が、開いた質問・閉じた質問の区別から自動的に導き出されない点には注意を喚起する必要があるだろう。

援助的面接における聞き手は話者のために望ましい変化を導入できるよう心を砕きつつ、同時に話者に対して侵襲的になったり苦しめたりすることを厳に戒めるものである。あるいは話者の得心しない形で誘導したり、気づかぬうちにある前提の中に取り込んでしまうことも避けようとしている。話者に配慮しつつ変化を導入するバランスが求められる点に援助的面接の独自性があると言えよう。そのために、話者の反応を常に観察しながら、聞き手は時々刻々と柔軟に対応を変化させていくことになる。

開いた質問・閉じた質問の二分法はあくまで手がかりとするに止め、みずからの質問に対する回答の自由度について常に考えて質問を工夫するよう初心者に伝えることが基本である。そして、援助的面接の場合には、質問のもたらす弊害に対する配慮を併行して補い伝えることが不可欠である。

引用文献

- Benjamin, A. 1987 *The Helping Interview with Cases*. 3rd ed. Houghton Mifflin Company.
林義子・上杉明訳 1990 援助する面接 春秋社
- Dillon, J.T. 1990 *The Practice of Questioning*.
Routledge.
- Egan, G. 1986 *The Skilled Helper: A systematic approach to effective helping*. 3rd ed. Pacific Grove, CA: Brooks. 鳴澤實・飯田栄監訳 1998 熟練カウンセラーをめざすカウンセリング・テキスト 創元社
- 福原真知子・アレン・E・アイビー・メアリ・B・アイビー 2004 *マイクロカウンセリングの理論と実践* 風間書房
- 原井宏明 2012 方法としての動機づけ面接：面接によ

- て人と関わるすべての人のために 岩崎学術出版
- Hill, C.E. 2009 *Helping Skills: Facilitating exploration, insight, and action.* (3rd ed.) American Psychological Association.
- 神田橋條治 1994 追補 精神科診断面接のコツ 岩崎学術出版
- Miller, W.R., Moyers, T.B., Ernst, D., & Amrhein, P. 2008 *Manual for the Motivational Interviewing Skill Code (MISC) Version 2.1.* Center on Alcoholism, Substance Abuse and Addictions. The University of New Mexico
- O'Hanlon, W.H. 1987 *Taproots: Underlying principle of Milton Erickson's therapy and hypnosis.* W.W.Norton. 森俊夫・菊池安希子訳 1995 *ミルトン・エリクソン入門* 金剛出版
- Olson, M., Seikkula, J., & Ziedonis, D. 2014 *The Key Elements of Dialogic Practice in Open Dialogue: Fidelity criteria.* The University of Massachusetts Medical School. Worcester, MA.
- Rollnick, S., Miller, W.R., & Butler, C.C. 2008 *Motivational Interviewing in Health Care: Helping patients change behavior.* The Guilford Press. 後藤恵監訳 2010 *動機づけ面接法実践入門: あらゆる医療現場で応用するために* 星和書店
- 杉原保史 2012 *技芸としてのカウンセリング入門* 創元社
- 滝浦真人 2008 *ポライトネス入門* 研究社
- 玉瀬耕治 2010 *質問の現代的課題 現代のエスプリ* 515, 37-47.
- 玉瀬耕治・井上由美子 1994 *処理質問における応答内容の量的および質的分析* 奈良教育大学紀要 43(1), 189-204.
- 玉瀬耕治・田中寛二 1988 *マイクロカウンセリングに関する研究* 奈良教育大学研究所紀要 24, 53-66.
- 玉瀬耕治・鳥巢佳子・井川純 1991 *実験的面接での応答の長さにあらず質問の流れの効果* 奈良教育大学紀要 40(1), 199-211.
- 遠山宜哉 2018 (印刷中) *いかにして好奇心を伝えるか: 援助面接における質問の弊害とその対処* ブリーフネット第19巻
- Wright, J.H., Basco, M.R., & Thase, M.E. 2006 *Learning Cognitive-Behavior Therapy: An illustrated guide.* American Psychiatric Publishing, Inc. 大野裕訳 2007 *認知行動療法トレーニングブック* 医学書院